

## 月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8 - 4

Tの話の続きが始まると、横田を除く同席者の間から静かな波動が起こり、それは徐々に興奮の息遣いに変化していった。

『人情紙風船』は、時代劇映画の一つのジャンルの中で最高傑作として映画人ならまだしも真紀や令子までもが認識しているある種普遍的な人情の機微を市井に生きる人々の日常に絡めて描いた山中貞雄作品である。

昭和十二年に勃発した日中戦争の為、『人情紙風船』の封切り当日に山中貞雄に赤紙が届き、中国へ出征する羽目になり、あろうことかひと月足らずで戦病死してしまう。享年二十八歳の惜しまれる逸材であった。

「本歌取りと同じようなものだから、台本はあらかじめ仕上がったし、パブリックドメイン化しているので、知的財産権侵害などの問題はないんだ。『源氏物語絵巻』を修復するように、優秀なスタッフと最新の映画機材を駆使してリメイクしなければ、やる意味がないと思っている。あとは企画書を持って協賛依頼の企業行脚をしなければならない。製作費の八割方の目処がつけば、制作内容などの公表をするつもりだが、来年の六月ごろまでにはクランクインする予定でいるんだ」とTは自信ありげに熱っぽい調子で語った。

「オリジナル版を尊重して、忠実に再現するというのでしょうか？」と接遇に徹しようと思っていた真紀だったが、どうしても確かめたくなくて尋ねた。

「この映画は歌舞伎で演じられた河竹黙阿弥の通称『髪結新三』が原作なんだ。山中監督とは時代が違うので面識はないが、彼が私の伯父とは因縁めいた関係にあったことも、今度の動機づけの一因になったのは確かだ。余談が長くなってしまったけれど、忠実にというよりは誠実に繋ぎたいと思っている」とTはよもやま話を挟んで答えてくれた。

「キャスティングはもう決めていらっしゃるのですか？」とKは相手の表情をじっと見たまま、シャンパンで赤みを帯びた頬を両手で包みながら尋ねた。

「ある程度は目星をつけていますが、まだ打診はしていません。相手方にもスケジュール調整が必要でしょうから、そろそろお願いしなければなりません」とTは慎重に言葉を選んで言った。

「私に年相応の役どころがあれば、端役でもなんでも使ってくださいませんか」とKは前のめりに言った。

「ありがとうございます！端役だなんてとんでもない。こうしてお会いできたのも何かのご縁に違いありません」とTは言って、あんにキャスティングする気持ちを伝えた。